

高校生のキャリア発達に係る基礎感覚を測る

－ 対人関係の自信、生産する意欲、進路決断に係る一考察 －

福岡県立博多青松高等学校
主幹教諭 宮原 清

1 課題意識

フリーター・ニート問題をはじめとする若者の自立支援の諸課題は、当該研究者が所属する単位制高校においてもゆるがせにできない課題である。従前のキャリア教育は、これを一定程度改善するのに資したが、生徒の内面的な発達をふまえた指導を広汎に実施しているとは言い難い。これらの限界は、多くの生徒を抱える学校現場において個々の生徒を見立てるのに様々な制約があり、その発達を見据えることが困難な点にあった。『コミュニケーション効力感』（対人関係の自信）と『社会形成意識』（生産する意欲）は多くの能力の基礎であると考え、中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」（2011年1月31日）における基礎的・汎用的能力としてあげられた4つの能力の基礎であると仮説し、新尺度の開発と進路不決断尺度の相関研究によりキャリア教育の在り方を次の段階へと発展させられると考えた。

2 研究経過

『コミュニケーション効力感』尺度は2009年2月より開発を開始し2010年10月に完成させた。この尺度では3つの下位尺度（F1：積極性（特定の対人関係がより深められると感じる）、F2：親和性（多くの人と付き合うことや、人付き合いに対する抵抗のなさを示す）、F3：高社交性（印象の悪い相手とも関係をつくれそうに感じる））を採用することとした。下位尺度ごとにCronbachの α 係数を複数回求め、信頼性を確保している。その過程で進路不決断尺度（1997, 長須）や学校不適應感との相関調査を行ったところ、多くの相関結果が得られた。女子の場合、『親和性』と進路選択・決定に関わる多くの下位尺度と強い相関を示した（2010, 宮原, 平山,

森中）。また、『親和性』『積極性』とも『学校不適應感』と負の相関があった（2010, 鈴江）。

また、2011年には高校生のキャリア発達を測定するための指標として、また生徒の自己評価及び高校教育での進路支援の取組の効果検証のため、他者ために何かをしたいと思う感覚や物事を最後までやり遂げないと気が済まない感覚、主体的な課題解決意欲など生産する意欲に係る意識、はたらくのに必要な基礎感覚を『社会形成意識』と規定し、これを測る尺度を開発した。開発は、質問項目を多く発想して精査を行い、予備アンケートを作成、実施して因子分析するとともに質問項目を再精査し、全分散の50%以上を説明する尺度の開発を目指し、信頼性（内的一貫性）を確認した。

3 研究目的

(1) 『コミュニケーション効力感』尺度および『社会形成意識』尺度短縮版開発【研究1】

これらの尺度は生徒・学生の進路相談・進路指導において活用される指標として作成されたものであり、学校教育現場での一層の活用のために実施時間の短縮が課題とされてきた。そこで、既に完成している『コミュニケーション効力感尺度』（3下位尺度14項目）と『社会形成意識尺度』（3下位尺度34項目）について、キャリア発達の基礎感覚を測る実施が簡易で、信頼度の高い短縮版の開発を目指した。調査する被験者は当該高校に加え、福岡県のA高校、熊本県のB高校、熊本県のC大学に加え、社会人のサンプルとして大手外食産業でも調査を行い、1000名以上の被験者を目標とした。

(2) 『コミュニケーション効力感』、『社会形成意識』、『進路不決断』の相関調査【研究2】

表記の3尺度の相関についてその構造を分析することで生徒のコミュニケーション効力感、社会

形成意識、学校不適応感、進路不決断の所属ごとの構造を明らかにするとともに、当該尺度間の相関関係について調査し、生徒のキャリア発達の仕組みを解明した。その際、前述のA高校およびB高校のデータのみならず、熊本県のC大学のデータも用いて比較検討を行った。なお、相関調査の際には適切な統計的分析と解釈が不可欠であり、その作業と分析には大阪青山大学の鈴江秀一朗氏の多大な協力を得るとともに、分析にもとづく解釈および考察にあたっては日本キャリア教育学会会長で追手門学院大学教授の三川俊樹氏のご指導とご助言をいただいた。

(3) 各尺度を活用して生徒個人や生徒集団を見立て対処法を見出すシステムの開発

尺度間の相関によって得られた知見を現実の生徒個人や集団に適用するためのシステム(試行版)を作成した。試行版の開発には、熊本県高等学校進路指導研究会事務局長で熊本工業高等学校進路指導主事の伊藤誠一先生に多大なご協力をいただいた。将来的にこのシステムを完成させ、学校、大学、企業における個人のキャリア発達、集団特性を見立てることができると期待される社会全般で利用可能なものとした。

【研究1】『コミュニケーション効力感』尺度および『社会形成意識』尺度短縮版の開発

1 研究方法

(1) 質問紙の構成

『コミュニケーションと進路観に関するアンケート』と題し、以下のとおり、3つからなる質問紙を構成した。

①フェイスシート

ID番号、性別のほか、得られたデータは生徒自身の振り返りと教育活動の改善のために使用し、他では使用しないことを明記した。

②『コミュニケーション効力感尺度(改訂版)』

2010年に開発した『コミュニケーション効力

感尺度』をもとに3下位尺度(計25項目)からなる『コミュニケーション効力感尺度(改訂版)』を構成、それぞれについて、「5：非常によくあてはまる」から「1：あてはまらない」の5件法で回答を求めた。その内容を表1に示した。

③『社会形成意識尺度(改訂版)』

2011年に開発した『社会形成意識尺度』を基に3下位尺度(計30項目)からなる『社会形成意識尺度(改訂版)』を構成し、それぞれについて、「5：非常によくあてはまる」から「1：あてはまらない」の5件法で回答を求めた。なお、その内容を表2に示した。

表1 「コミュニケーション効力感尺度(改訂版)」の内容

<p><親和性></p> <p>1. 新しく出会った人には自分の方から話しかける</p> <p>4. 人に話しかけることが得意だ</p> <p>7. 新しく出会った人と仲よくしたいのに、なかなか話しかけられないことがある</p> <p>10. 人と話をするのは苦手だ</p> <p>13. 人と仲よくなる方法を知っている</p> <p>* 16. 人の話を聴くことが得意だ</p> <p>* 19. 知らない人に話しかけられても対応できる</p> <p><積極性></p> <p>2. 仲良くなりたいと思う人には、積極的に話しかける</p> <p>5. これまでうまくやってこれた人とは、今後はさらに仲よくなれると思う</p> <p>8. 今、人間関係がうまくいかなくとも、お互いに理解できる時がくると思う</p> <p>11. つきあいにくそうに見える人であっても、仲よくしてみたい</p> <p>14. 新しく出会った人ともよい人間関係を築くことができると思う</p> <p>17. 友人とケンカをしても、すぐに仲直りをする事ができる</p> <p>* 20. 仲よくなりたいと思った人には、自分の方から声をかける</p> <p><高社交性></p> <p>3. つきあいにくそうに見える人に出会うと、距離をおきたくなる</p> <p>6. つきあいにくそうな相手であっても、必要があれば仲よくなるまでつきあえると思う</p> <p>* 9. 自分と合わないと思う人とは距離をおきたくなる</p> <p>* 12. 苦手なタイプの人とは上手く話せないと思う</p> <p>* 15. どんな人とも仲よくできると思う</p> <p>* 18. 話ができないような苦手なタイプの人はいない</p> <p>* 21. 話が合わない人であっても、それなりに会話をすることができる</p> <p>* 22. 相性が悪いと感じた人とは会話を避ける</p> <p>* 23. あまり話したことがない人とも話をしてみたいと思う</p> <p>* 24. どんな人ともうまく付き合うことができる</p> <p>* 25. 苦手なタイプの人とも、うまくつきあっていく自信がある</p>
--

*は新規項目

表2 「社会形成意識尺度(改訂版)」の内容

<貢献性> 1. 人を喜ばせることが好きだ 4. 困った人を助けることに喜びを感じる 7. 困った人を見かけると手助けしてあげたくなる 10. 人の喜びを自分の喜びのように感じる 13. 知らない人が困っていても手伝おうとは思わない 16. 子どもやお年寄りには優しくしたいと思う 19. ボランティア活動が好きだ 22. 人に仕事を頼まれたら快く引き受けたい 25. 自分に利益がないと思ったら、人の手伝いはしない	
<責任感> 2. 始めたことは何とか最後までやり遂げたい 5. やり出したことを途中で投げ出すのは嫌いである 8. 一度引き受けたら最後までやり遂げたい 11. 達成できそうにない課題でも何とか達成できる方法を見つける努力をしたい 14. 決めたことが成し遂げられそうになくても、何とか達成できる方法を考えたい 17. 自分がしなければならないことを成し遂げられるかを見通して実行したい 20. 自分のことより全体のことを考えて行動する 23. 期限に間に合わないと思ったら、作業をやめてしまう 26. 人に頼まれたことでも、引き受けた以上は最後までやるべきだと思う	
<生産的意識> 3. 自分で課題を見つけて解決していくことが好きだ 6. 美味しい食べ物に出会ったとき、自分でも作ってみたいと思うことがある 9. 他人に決められたことだけをやるのではなく、自分で工夫したり改善することが好きだ	
* 12. 自分で学んだことを人にも教えてみたいと思う * 15. 自分で問題点を見つけて解決し、ものごとを進めるのが好きだ * 18. 店や会社の経営など、いつかは自分で何かをやってみたい * 21. 他人に言われた通りにするよりも、自分で考えて行動することが好きだ * 24. 人に説明をする時は、自分の言葉で説明する方である * 27. 自分で工夫や発明をしてみたいと思う * 28. 自分で考えるよりも、人に合わせる方が好きだ * 29. 決断をする時は人の意見に従う方だ * 30. 初めて何かをするときは、正しいやり方を教えて欲しい	

(2) 調査対象

調査は2012年6月に、A高校およびB高校に対してアンケート用紙を用いて行った。今回は、回収されたデータ1330名分のデータのうち、複数の項目の記入漏れ、同じ数値にのみ回答するなど、回答の歪曲や作為があると判断されたデータ（3名分）を除いた1327名分のデータを分析対象とした（表3）。

1年		2年		3年		計
男子	女子	男子	女子	男子	女子	
285	105	300	121	329	187	1327

2 結果

(1) 「コミュニケーション効力感尺度(改訂版)」の因子分析による検討…「コミュニケーション効力感尺度(改訂版)」の分析
 ① 「コミュニケーション効力感尺度(改訂版)」の尺度構成

コミュニケーション効力感尺度(改訂版)の因子分析については、最尤法によってvarimax回転を行い、固有値の減衰状況と因子の適切な解釈の可能性を検討した結果、3因子解を採用した。なお、この3因子で全分散の41.536%を説明した。また、各因子の解釈にあたっては、負荷量の絶対値が.400以上の項目を採用した。各因子の項目内容とvarimax回転後の因子負荷量は表4に示した。

No.	項目内容	F1	F2	F3	共通性
4	人に話しかけることが得意だ	.781	.242	-.150	.690
1	新しく出会った人には自分の方から話しかける	.749	.276	-.068	.642
20	仲よくなりたいと思った人には、自分の方から声をかける	.704	.385	.075	.649
2	仲よくなりたいと思う人には、積極的に話しかける	.686	.359	.084	.606
*10	人と話すことは苦手だ	-.614	-.116	.266	.461
*7	新しく出会った人と仲よくなりたいのに、なかなか話しかけられないことがある	-.595	.088	.300	.451
13	人と仲よくなる方法を知っている	.489	.308	-.142	.353
21	話が合わない人であっても、それなりに会話をする事ができる	.328	.593	-.085	.466
6	つきあいにくそうな相手であっても、必要があれば仲よくなるまでつきあえると思う	.104	.583	-.241	.409
15	どんな人とも仲よくできると思う	.310	.555	-.351	.527
24	どんな人ともうまく付き合うことができる	.374	.551	-.363	.575
11	つきあいにくそうに見える人であっても、仲よくしてみたい	.042	.541	-.188	.329
25	苦手なタイプのの人とも、うまくつきあっていく自信がある	.236	.539	-.450	.549
23	あまり話したことがない人とも話してみたいと思う	.258	.528	-.076	.351
14	新しく出会った人ともよい人間関係を築くことができると思う	.452	.510	-.074	.470
8	今、人間関係がうまくいかなくとも、お互いに理解できる時がくると思う	.054	.496	-.099	.259
16	人の話を聴くことが得意だ	.083	.433	-.026	.195
19	知らない人に話しかけられても対応できる	.388	.413	.010	.321
*9	自分と合わないと思う人とは距離をおきたくなる	-.025	-.053	.637	.409
*3	つきあいにくそうに見える人に会おうと、距離をおきたくなる	-.040	-.147	.588	.369
*22	相性が悪いと感じた人とは会話を避ける	-.005	-.093	.562	.325
*12	苦手なタイプのの人とは上手く話せないと思う	-.177	-.085	.561	.353
18	話ができないような苦手なタイプの人はいない	.189	.340	-.413	.322
17	友人とケンカをしても、すぐに仲直りをする事ができる	.223	.374	-.163	.216
5	これまでうまくやってこれた人とは、今後はさらに仲よくなれると思う	.131	.260	.018	.085
寄与率(%)		16.339	15.679	9.518	41.536

*は逆転項目

第1因子は「人に話しかけることが得意だ」「新しく出会った人には自分の方から話しかける」など、「コミュニケーション効力感尺度」の『親和性』と同様の7項目から構成された。そこでこの因子を『F1.親和性』と命名した。

第2因子は「話が合わない人であっても、それなりに会話をする事ができる」「つきあいにくそうな相手であっても、必要があれば仲よくなるまでつきあえると思う」など、11項目から構成された。これらの項目には「コミュニケーション効力感尺度」の『高社交性』を想定して作成された新規項目が含まれているが、項目内容を検討すれば、対人関係をより深めようとする傾向を示す内容で構成されている。そこでこの因子を『F2.積極性』と命名した。

第3因子は「自分と合わないと思う人とは距離をおきたくなる」「つきあいにくそうに見える人に出会おうと、距離をおきたくなる」など、「コミュニケーション効力感尺度」の『高社交性』と同様の5項目から構成された。そこでこの因子を『F3.高社交性』と命名した。

また、尺度の短縮版の作成にあたり、質問項目の内容と因子負荷量に考慮し各因子ごとに5項目ずつの採択とした。その内容は表5に示した。

No.	項目内容
1	新しく出会った人には自分の方から話しかける
4	人に話しかけることが得意だ
10	人と話すことは苦手だ
13	人と仲よくなる方法を知っている
20	仲よくなりたいと思った人には、自分の方から声をかける
11	つきあいにくそうに見える人であっても、仲よくしてみたい
14	新しく出会った人ともよい人間関係を築くことができると思う
21	話が合わない人であっても、それなりに会話をする事ができる
23	あまり話したことがない人とも話してみたいと思う
25	苦手なタイプのの人とも、うまくつきあっていく自信がある
3	つきあいにくそうに見える人に出会おうと、距離をおきたくなる
9	自分と合わないと思う人とは距離をおきたくなる
12	苦手なタイプのの人とは上手く話せないと思う
18	話ができないような苦手なタイプの人はいない
22	相性が悪いと感じた人とは会話を避ける

次に、「コミュニケーション効力感尺度(改訂版)」の信頼性(内的一貫性)を測定するため、Cronbachの α 係数を算出し、表6に示した。

下位尺度	項目数	α 係数
親和性	5	.841
積極性	5	.759
高社交性	5	.723

この結果、.841~.723と、信頼性(内的一貫性)が確認された。

②「コミュニケーション効力感尺度(改訂版)」の構造

「コミュニケーション効力感尺度(改訂版)」の下位尺度間の相関をPearsonの相関係数によって算出し、全体の結果を表7-1、男子の結果を表

7-2、女子の結果を表7-3に示した。

	F1	F2	F3
親和性	-	.610 ***	.289 ***
積極性		-	.409 ***
高社交性			-
***p<.001			

	F1	F2	F3
親和性	-	.624 ***	.284 ***
積極性		-	.398 ***
高社交性			-
***p<.001			

	F1	F2	F3
親和性	-	.589 ***	.300 ***
積極性		-	.433 ***
高社交性			-
***p<.001			

この結果、「コミュニケーション効力感尺度(改訂版)」の下位尺度は互いに関連していることが示唆された。

③ 「コミュニケーション効力感尺度(改訂版)」の男女差

「コミュニケーション効力感尺度(改訂版)」の男女差を検討するため、3つの下位尺度ごとの平均と標準偏差を男女別に算出し、その平均の差をt検定を用いて検討した結果を表8に示した。

尺度名	男子(n=914)		女子(n=413)		t値
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
親和性	15.31	4.32	14.92	4.42	1.517
積極性	15.45	3.57	15.73	3.58	-1.360
高社交性	14.25	3.64	14.20	4.01	0.223

この結果、高校生においてはコミュニケーション効力感尺度に差がないことが示された。

④ コミュニケーション効力感尺度(改訂版)の学年差

コミュニケーション効力感尺度(改訂版)の学年差を検討するために、3つの下位尺度ごとの平均値と標準偏差を学年別に算出し、表9に示した。次に、学年を独立変数、各下位尺度を従属変数とした分散分析を行ったものを表10に示した。主効果が認められたため、多重比較(Tukey法)を行ったところ、積極性において、3年生は2年生より0.1%水準で有意に高い得点を示した。

尺度名	1年生(n=390)		2年生(n=421)		3年生(n=516)	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
親和性	15.37	4.42	14.74	4.21	15.41	4.39
積極性	15.57	3.74	15.05	3.32	15.90	3.61
高社交性	14.28	3.74	14.02	3.58	14.39	3.91

尺度名	平方和	自由度	平均平方	F値	多重比較 (5%水準)
親和性	121.622	2	60.811	3.222 *	
積極性	165.477	2	82.739	6.522 **	2<<<3
高社交性	33.375	2	16.688	1.182	

(2) 「社会形成意識尺度(改訂版)」の因子分析による検討…「社会形成意識尺度(改訂版)」の分析

① 「社会形成意識尺度(改訂版)」の尺度構成

社会形成意識尺度(改訂版)の因子分析については、最尤法によってvarimax回転を行い、固有値の減衰状況と因子の適切な解釈の可能性を検討した結果、3因子解を採用した。なお、この3因子で全分散の35.437%を説明した。また、各因子の解釈にあたっては、負荷量の絶対値が.400以上の項目を採用した。各因子の項目内容とvarimax回転後の因子負荷量は表11に示した。

第1因子は「困った人を見かけると手助けしてあげたくなる」「人の喜びを自分の喜びのように感じる」など、「社会形成意識尺度」の『貢献性』と同様の9項目から構成された。そこでこの因子を『F1.貢献性』と命名した。

第2因子は「始めたことは何とか最後までやり遂げたい」「やり出したことを途中で投げ出すのは嫌いである」など、「社会形成意識尺度」の『責任感』と同様の5項目から構成された。そこでこの因子を『F2.責任感』と命名した。

第3因子は「自分で問題点を見つけて解決し、ものごとを進めるのが好きだ」「他人に決められたことだけをやるのではなく、自分で工夫したり改善することが好きだ」など、主体的な課題発見、課題解決への関心8項目から構成された。そこでこの因子を『F3.生産的意識』と命名した。

また、尺度の短縮版の作成にあたり、質問項目の内容と因子負荷量に考慮し各因子ごとに5項目ずつの採択とした。その内容は表12に示した。

表11 社会形成意識尺度(改訂版)の項目内容と因子負荷量

No.	項目内容	F1	F2	F3	共通性
7	困った人を見かけると手助けしてあげたくなる	.768	.245	.091	.658
4	困った人を助けることに喜びを感じる	.760	.211	.119	.636
10	人の喜びを自分の喜びのように感じる	.624	.059	.195	.430
1	人を喜ばせることが好きだ	.594	.144	.139	.392
16	子どもやお年寄りには優しくしたいと思う	.574	.203	.046	.373
19	ボランティア活動が好きだ	.538	-.027	.158	.315
12	自分で学んだことを人にも教えてみたいと思う	.466	.033	.288	.301
22	人に仕事を頼まれたら快く引き受けたい	.465	.303	.219	.356
* 13	知らない人が困っていても手伝おうとは思わない	-.445	-.274	.082	.280
2	始めたことは何とか最後までやり遂げたい	.276	.649	.338	.611
5	やり出したことを途中で投げ出すのは嫌いだ	.213	.598	.365	.537
8	一度引き受けたら最後までやり遂げたい	.398	.591	.309	.603
* 23	期限に間に合わないと思ったら、作業をやめてしまう	.024	-.481	-.084	.239
26	人に頼まれたことでも、引き受けた以上は最後までやるべきだと思う	.390	.471	.172	.403
15	自分で問題点を見つけて解決し、ものごとを進めるのが好きだ	.342	.058	.659	.555
9	他人に決められたことだけをやるのではなく、自分で工夫したり改善することが好きだ	.273	.025	.638	.482
3	自分で課題を見つけて解決していくことが好きだ	.257	.214	.587	.457
11	達成できそうにない課題でも何とか達成できる方法を見つける努力をしたい	.294	.314	.563	.502
14	決めたことが成し遂げられそうになくても、何とか達成できる方法を考えたい	.296	.298	.554	.483
27	自分で工夫や発明をしてみたいと思う	.198	-.153	.494	.306
21	他人に言われた通りにするよりも、自分で考えて行動することが好きだ	.226	.046	.489	.292
17	自分がしなければならぬことを成し遂げられるかを見通して実行したい	.370	.191	.410	.341
25	自分に利益がないと思ったら、人の手伝いはしない	-.255	-.307	.090	.167
30	初めて何かをするときは、正しいやり方を教えて欲しい	-.005	.237	-.078	.062
20	自分のことより全体のことを考えて行動する	.366	.169	.250	.225
24	人に説明をする時は、自分の言葉で説明する方である	.310	.047	.261	.166
6	美味しい食べ物に出会ったとき、自分でも作ってみたいと思うことがある	.300	-.048	.158	.118
18	店や会社の経営など、いつかは自分で何かをやってみたい	.255	-.180	.332	.208
28	自分で考えるよりも、人に合わせる方が好きだ	.079	-.040	-.240	.065
29	決断をする時は人の意見に従う方だ	.097	-.042	-.235	.066
寄与率(%)		15.717	11.592	8.128	35.437

*は逆転項目

表12 社会形成意識尺度(改訂版)の採択された項目内容

No.	項目内容
1	人を喜ばせることが好きだ
4	困った人を助けることに喜びを感じる
7	困った人を見かけると手助けしてあげたくなる
10	人の喜びを自分の喜びのように感じる
16	子どもやお年寄りには優しくしたいと思う
2	始めたことは何とか最後までやり遂げたい
5	やり出したことを途中で投げ出すのは嫌いだ
8	一度引き受けたら最後までやり遂げたい
23	期限に間に合わないと思ったら、作業をやめてしまう
26	人に頼まれたことでも、引き受けた以上は最後までやるべきだと思う
3	自分で課題を見つけて解決していくことが好きだ
9	他人に決められたことだけをやるのではなく、自分で工夫したり改善することが好きだ
11	達成できそうにない課題でも何とか達成できる方法を見つける努力をしたい
14	決めたことが成し遂げられそうになくても、何とか達成できる方法を考えたい
15	自分で問題点を見つけて解決し、ものごとを進めるのが好きだ

次に、「社会形成意識尺度(改訂版)」の信頼性(内的一貫性)を測定するため、Cronbachの α 係数を算出し、表13に示した。この結果、.827～.782と、信頼性(内的一貫性)が確認された。

下位尺度	項目数	α 係数
貢献性	5	.824
責任感	5	.782
生産的意識	5	.827

②「社会形成意識尺度(改訂版)」の構造

「社会形成意識尺度(改訂版)」の下位尺度間の相関をPearsonの相関係数によって算出し、全体の結果を表14-1、男子の結果を表14-2、女子の結果を表14-3に示した。

	F1	F2	F3
貢献性	-	.500 ***	.508 ***
責任感		-	.563 ***
生産的意識			-
			***:p<.001

	F1	F2	F3
貢献性	-	.533 ***	.532 ***
責任感		-	.568 ***
生産的意識			-
			***:p<.001

	F1	F2	F3
貢献性	-	.431 ***	.435 ***
責任感		-	.585 ***
生産的意識			-
			***:p<.001

この結果、「社会形成意識尺度」の下位尺度は互いに関連していることが示唆された。

③「社会形成意識尺度(改訂版)」の男女差

「社会形成意識尺度(改訂版)」の男女差を検討するために、3つの下位尺度ごとの平均と標準偏差を男女別に算出し、その平均の差をt検定を用いて検討した結果を表15に示した。

尺度名	男子(n=109)		女子(n=110)		t値
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
貢献性	18.57	3.78	19.74	3.75	-5.216
責任感	19.32	3.71	19.51	3.73	-.852
生産的意識	16.43	3.81	16.07	3.67	1.589
					<<<:p<.001

この結果、貢献性において、男子よりも女子の方が0.1%水準で有意に高い得点を示した。

④社会形成意識尺度(改訂版)の学年差の検討

3つの下位尺度ごとの平均値と標準偏差を学年別に算出し、表16に示した。

次に、学年を独立変数、各下位尺度を従属変数

とした分散分析を行ったものを表17に示した。

尺度名	1年生(n=390)		2年生(n=421)		3年生(n=516)	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
貢献性	18.58	3.91	18.62	3.66	19.46	3.80
責任感	18.89	3.70	19.10	3.62	19.97	3.74
生産的意識	16.06	3.81	15.81	3.55	16.93	3.85

尺度名	平方和	自由度	平均平方	F値	多重比較(5%水準)
貢献性	230.357	2	115.179	8.024 ***	1<<<3,2<<3
責任感	304.476	2	152.238	11.186 ***	1<<<3,2<<3
生産的意識	326.295	2	163.147	11.655 ***	1<<<3,2<<3
					<<:p<.01,<<<:p<.001

主効果が認められたため、多重比較(Tukey法)を行った。貢献性において、3年生は1, 2年生より1%水準で有意に高い得点を示した。責任感において、3年生は1年生より0.1%水準で有意に高い得点を示し、2年生より1%水準で有意に高い得点を示した。また、3年生は1, 2年生より1%水準で有意に高い得点を示した。つまり、はたらく基礎感覚である社会形成意識は3年時に高まることが示唆された。

(3) コミュニケーション効力感と社会形成意識の関連の検討

コミュニケーション効力感尺度(改訂版)の3下位尺度と社会形成意識尺度(改訂版)の3下位尺度との相関をPearsonの相関係数によって算出し、男子の結果を表18-1、女子の結果を表18-2に示した。

	貢献性	責任感	生産的意識
親和性	.403 ***	.221 ***	.331 ***
積極性	.483 ***	.328 ***	.429 ***
高社交性	.138 ***	.102 **	.122 ***
			p<.01,*:p<.001

	貢献性	責任感	生産的意識
親和性	.302 ***	.205 ***	.278 ***
積極性	.466 ***	.355 ***	.401 ***
高社交性	.162 ***	.118 *	-.022
			*p<.05,***:p<.001

これらの結果から、男子ではコミュニケーション効力感尺度の「親和性」、「積極性」は社会形成意識尺度(改訂版)の各下位尺度と0.1%水準で有意な正の相関を示した。また、「高社交性」は「貢献性」、「生産的意識」0.1%水準で有意な正の相関を示し、「責任感」と1%水準で有意な正の相関を示した。このことから、男子ではコミュニケーション効力感が高ければ、社会形成意識が高まる傾向にあることが示された。特に「親和性」と「貢献性」、また「積極性」と「貢献性」、

「生産的意識」は相関係数が.400以上と高くより深い関係にあると考えられる。

続いて女子では、コミュニケーション効力感尺度の「親和性」、「積極性」は社会形成意識尺度(改訂版)の各下位尺度と0.1%水準で有意な正の相関を示した。また、「高社交性」は「貢献性」と0.1%水準で有意な正の相関を示し、「責任感」と5%水準で有意な正の相関を示した。このことから、女子ではコミュニケーション効力感の「親和性」、「積極性」が高ければ、社会形成意識が高まる傾向にあることが示された。特に「積極性」

と「貢献性」、「生産的意識」は相関係数が.400以上と高くより深い関係にあると考えられる

このことから、コミュニケーションに関する効力感を測定する「コミュニケーション効力感尺度(改訂版)」と社会形成意識を測定する「社会形成意識尺度(改訂版)」両尺度の信頼性、構造が確認され、相互の関連性が明らかとなった。男女で若干の構造の違いはあるものの、コミュニケーションに自信がある場合、「貢献性」「責任感」「生産的意識」がいずれも高まる傾向にあることは明らかとなった。

【研究2】『コミュニケーション効力感』、『社会形成意識』、『進路不決断』の関係

1 研究方法

(1) 質問紙の構成

「コミュニケーションと進路観に関するアンケート」と題し、以下の4つからなる質問紙を構成した。

①フェイスシート

学籍番号、HR番号、性別を尋ねたほか、得られたデータは生徒自身の振り返りと教育活動の改善のために使用し、他では使用しないことを明記した。

②「コミュニケーション効力感尺度(改訂版)」

3下位尺度(各5項目)からなる尺度で、それぞれについて、「5:非常によくあてはまる」から「1:あてはまらない」の5件法で回答を求めた。なお、その内容を表1に示した。

③「社会形成意識尺度(改訂版)」

3下位尺度(計30項目)からなる尺度で、それぞれについて、「5:非常によくあてはまる」から「1:あてはまらない」の5件法で回答を求めた。なお、その内容を表2に示した。

④「進路不決断尺度」(長須, 1996)

8下位尺度(各5項目)からなる尺度で、それぞれについて、「5:非常によくあてはまる」から「1:あてはまらない」の5件法で回答を求めた。なお、その内容を表3に示した。

表1 コミュニケーション効力感尺度(改訂版)の項目内容

No.	項目内容
1	新しく出会った人には自分の方から話しかける
2	人に話しかけることが得意だ
3	人と話すことは苦手だ
4	人と仲よくなる方法を知っている
5	仲よくなりたいと思った人には、自分の方から声をかける
6	つきあいにくそうに見える人であっても、仲よくしてみたい
7	新しく出会った人ともよい人間関係を築くことができると思う
8	話が合わない人であっても、それなりに会話をすることができる
9	あまり話したことがない人とも話をしてみたいと思う
10	苦手なタイプの人とも、うまくつきあっていく自信がある
11	つきあいにくそうに見える人に出会うと、距離をおきたくなる
12	自分と合わないと思う人とは距離をおきたくなる
13	苦手なタイプの人とは上手く話せないと思う
14	話ができないような苦手なタイプの人はいない
15	相性が悪いと感じた人とは会話を避ける

表2 社会形成意識尺度(改訂版)の項目内容

No.	項目内容
1	人を喜ばせることが好きだ
2	困った人を助けることに喜びを感じる
3	困った人を見かけると手助けしてあげたくなる
4	人の喜びを自分の喜びのように感じる
5	子どもやお年寄りには優しくしたいと思う
6	始めたことは何とか最後までやり遂げたい
7	やり出したことを途中で投げ出すのは嫌いだ
8	一度引き受けたら最後までやり遂げたい
9	期限に間に合わないと思ったら、作業をやめてしまう
10	人に頼まれたことでも、引き受けた以上は最後までやるべきだと思う
11	自分で課題を見つけて解決していくことが好きだ
12	他人に決められたことだけをやるのではなく、自分で工夫したり改善することが好きだ
13	達成できそうにない課題でも何とか達成できる方法を見つける努力をしたい
14	決めたことが成し遂げられそうになくても、何とか達成できる方法を考えたい
15	自分で問題点を見つけて解決し、ものごとを進めるのが好きだ

表3 進路不決断尺度の項目内容

No.	項目内容
1	進路を決めることに対して不安がある
2	自分が望む進路を決められるかどうか心配である
3	どのようにして進路を決めれば良いかわからない
4	具体的な進路をしぼりきれない(としている)
5	進路を決めることの難しさを感じる
6	いろいろなことに興味があるので、どこを進路先にしたら良いかわからない
7	魅力ある進路がたくさんある
8	可能性のある進路がたくさんある
9	いろいろと考えすぎて、自分に合う進路が決まらない
10	他の人の意見がいろいろとあるので、自分にある進路を決められない
11	進路の問題は重要なことなので、誰かと相談したい
12	今までも重大な問題は親などに相談してきたので、進路の問題でも相談したい
13	自分ひとりで何かを決めた経験が少ないので、進路について誰かと相談したい
14	自分一人では進路を決めにくいので、誰かと相談や話し合いをしてみたい
15	自分に合う進路を教えてくれるような検査を受けたい
16	希望する進路はあるが、それに親が反対するのではないかと思う
17	思わぬことで希望する進路にいけないのではないかと考えてしまう
18	進路について、友達と意見が違うのではないかと心配である
19	社会の変化や景気の変動が、希望する進路に大きな影響を与えるのではないかと考えてしまう
20	自分の能力では希望する進路にいけないのではないかと思う
21	進路の決定は、運や偶然によって決まることが多い
22	進路の決定は自分ひとりの力ではどうしようもない
23	自分の努力や能力よりも、他からの影響で進路が決まることが多い
24	自分だけでは、進路は決定できない
25	進路のために積極的に努力するよりは、チャンスを待つ方がよい
26	自分の興味や関心がよくわからない
27	自分の能力や適性がよくわからない
28	進路先での生活(学校生活や職業生活)のようすがよくわからない
29	進路を決めるために必要な情報がない
30	自分のことについても、進路先についても、よくわからない
31	今まであまり進路のことを真剣に考えたことがない
32	将来のことはわからないから、進路のことは考えたくない
33	今の生活に満足しているので、できるならばこのままの生活を続けたい
34	進学も就職もせずに、好きなことをしたい
35	現在していること(趣味など)をなしとげたいので、進学も就職もしたくない
36	具体的な進路の希望はあるが、準備が十分でないので試験が心配である
37	進路の希望は明確なのだが、試験が難しそうなので自信がない
38	希望する進路先はあるが、準備が十分でないので、それが自分にとって最良かわからない
39	進路に関して準備が不足しているので、希望する進路先において自分が十分に活躍できるかどうか不安である
40	進路選択のための準備が十分ではなかったのではないかと思う

(2) 調査対象

本調査は2012年11月にB高校に対し、2012年6月にC大学に対してアンケート用紙を用いて行った。

今回は回収されたデータから、高校においては1123名分のデータを、大学においては132名分を分析対象とした(表4,表5)。

表4 調査対象者内訳(高校生)

1年		2年		3年		計
男子	女子	男子	女子	男子	女子	
240	72	334	88	307	82	1123

表5 調査対象者内訳(大学生)

男子	女子	不明	計
104	26	2	132

2 結果 I 高校生の各尺度の検討

(1) 「コミュニケーション効力感(改訂版)」の検討

① 「コミュニケーション効力感尺度(改訂版)」の信頼性(内的一貫性)を測定

Cronbachの α 係数を算出し、表6に示した。この結果、.837～.785と、十分な信頼性(内的一貫性)が確認された。

表6 コミュニケーション効力感尺度(改訂版)の内的一貫性

下位尺度	項目数	α 係数
親和性	5	.837
積極性	5	.785
高社交性	5	.785

②「コミュニケーション効力感尺度(改訂版)」の男女差の検討

3つの下位尺度ごとの平均と標準偏差を男女別に算出し、その平均の差をt検定を用いて検討した結果を表7に示した。

表7 コミュニケーション効力感の男女差(N=1123)

尺度名	男子(n=881)		女子(n=242)		t値
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
親和性	16.63	4.07	16.41	4.26	.737
積極性	15.94	3.82	16.26	3.87	-1.145
高社交性	15.09	3.87	15.65	4.01	-1.977

<p<.05

この結果、「高社交性」において男子に比較して女子の方が5%水準で有意に高い得点を示した。

③「コミュニケーション効力感尺度(改訂版)」の学年差の検討

3つの下位尺度ごとの平均値と標準偏差を学年別に算出し、表8に示した。次に、学年を独立変数、各下位尺度を従属変数とした分散分析を行ったものを表9に示した。主効果が認められたため、多重比較(Tukey法)を行ったところ、「親和性」「積極性」において、3年生は前回調査と同様に1、2年生よりも有意に高い得点を示した。

表8 コミュニケーション効力感尺度(改訂版)の平均と標準偏差

尺度名	1年生(n=312)		2年生(n=422)		3年生(n=389)	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
親和性	15.84	3.89	16.27	4.10	17.51	4.12
積極性	15.31	3.71	15.88	3.76	16.72	3.89
高社交性	14.87	3.93	15.22	3.84	15.48	3.96

表9 コミュニケーション効力感尺度(改訂版)の分散分析結果

尺度名	平方和	自由度	平均平方	F値	多重比較(5%水準)
親和性	545.98	2	272.99	16.63 ***	1<<<3,2<<<3
積極性	355.68	2	177.84	12.37 ***	1<<<3,2<<<3
高社交性	64.52	2	32.26	2.12	

<<p<.01,<<p<.001

(2)「社会形成意識尺度(改訂版)」の検討

①「社会形成意識尺度(改訂版)」の信頼性(内的一貫性)測定

Cronbachの α 係数を算出し、表10に示した。この結果、.881~.838と、十分な信頼性(内的一貫性)が確認された。

表10 社会形成意識尺度(改訂版)の内的一貫性

下位尺度	項目数	α 係数
貢献性	5	.881
責任感	5	.838
生産的意識	5	.881

②「社会形成意識尺度(改訂版)」の男女差の検討

3つの下位尺度ごとの平均と標準偏差を男女別に算出し、その平均の差をt検定を用いて検討した結果を表11に示した。

表11 社会形成意識の男女差(N=1123)

尺度名	男子(n=881)		女子(n=242)		t値
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
貢献性	19.16	4.15	20.43	3.60	-4.694
責任感	19.63	3.97	20.41	3.43	-3.004
生産的意識	16.80	4.10	16.06	3.89	2.520

<p<.05,<<p<.01,<<<p<.001

この結果、「貢献性」「責任感」においては、男子に比較して女子の方が有意に高い得点を示し、「生産的意識」においては女子に比較して男子の方が有意に高い得点を示した。

③「社会形成意識尺度(改訂版)」の学年差の検討

3つの下位尺度ごとの平均値と標準偏差を学年別に算出し、表12に示した。

表12 社会形成意識尺度(改訂版)の平均と標準偏差

尺度名	1年生(n=312)		2年生(n=422)		3年生(n=389)	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
貢献性	18.43	3.93	19.45	3.93	20.23	4.16
責任感	18.32	3.87	20.04	3.70	20.72	3.70
生産的意識	15.86	3.92	16.48	4.02	17.44	4.11

次に、学年を独立変数、各下位尺度を従属変数とした分散分析を行ったものを表13に示した。主効果が認められたため、多重比較(Tukey法)を行った。「貢献性」「責任感」においては、3年生は1、2年生より有意に高い得点を示し、2年生は1年生より有意に高い得点を示した。「生産的意識」においては、3年生は1、2年生より有意に高い得点を示した。前回調査同様に社会形成意識は3年時に最も高まることが確認された。

表13 社会形成意識尺度(改訂版)の分散分析結果

尺度名	平方和	自由度	平均平方	F値	多重比較(5%水準)
貢献性	561.80	2	280.90	17.44 ***	1<<2,1<<<3,2<3
責任感	1037.61	2	518.81	36.89 ***	1<<2,1<<<3,2<3
生産的意識	450.38	2	225.19	13.92 ***	1<<<3,2<<3

<p<.05,<<p<.01,<<<p<.001

(3)「進路不決断尺度」の検討

①「進路不決断尺度」の信頼性(内的一貫性)測定

Cronbachの α 係数を算出し、表14に示した。この結果、.891~.706と、十分な信頼性(内的一貫性)が確認された。

表14 進路不決断尺度の内的一貫性

下位尺度	項目数	α 係数
進路決定不安	5	.891
進路選択葛藤	5	.710
進路相談希求	5	.798
進路障害不安	5	.739
進路外的統制	5	.706
進路情報不足	5	.847
進路モラリアム	5	.768
進路準備不安	5	.859

②「進路不決断尺度」の男女差の検討

8つの下位尺度ごとの平均と標準偏差を男女別に算出し、その平均の差をt検定を用いて検討した結果を表15に示した。

表15 進路不決断尺度の男女差(N=1123)

尺度名	男子(n=881)		女子(n=242)		t値
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
進路決定不安	15.17	5.67	15.50	5.89	-0.784
進路選択葛藤	13.77	4.16	13.39	4.33	1.227
進路相談希求	15.70	4.52	15.45	4.70	.764
進路障害不安	12.63	4.26	>> 11.80	4.30	2.685
進路外的統制	12.78	3.89	>> 11.90	4.05	3.090
進路情報不足	13.50	4.82	13.28	5.19	0.604
進路モラトリアム	10.44	4.31	>>> 9.07	3.35	5.280
進路準備不安	13.76	4.76	> 12.81	5.19	2.575

<p<.05,<<p<.01,<<<p<.001

この結果、「進路障害不安」「進路外的統制」

「進路モラトリアム」「進路準備不安」において、女子に比較して男子の方が有意に高い得点を示した。このことから、高校生は男子の方が進路不決断を抱きやすい傾向にあることが示唆された。

③「進路不決断尺度」の学年差の検討

8つの下位尺度ごとの平均値と標準偏差を学年別に算出し、表16に示した。

表16 進路不決断尺度の平均と標準偏差

尺度名	1年生(n=312)		2年生(n=422)		3年生(n=389)	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
進路決定不安	17.00	5.07	16.93	5.29	12.01	5.25
進路選択葛藤	14.71	3.92	14.33	3.94	12.17	4.26
進路相談希求	15.52	4.49	16.49	4.20	14.83	4.83
進路障害不安	13.38	4.13	13.38	3.83	10.69	4.31
進路外的統制	12.93	3.95	12.59	3.60	12.33	4.27
進路情報不足	14.96	4.35	14.58	4.59	11.02	4.72
進路モラトリアム	11.12	4.15	10.11	4.07	9.39	4.11
進路準備不安	14.64	4.46	15.16	4.09	10.94	4.89

次に、学年を独立変数、各下位尺度を従属変数とした分散分析を行ったものを表17に示した。

表17 進路不決断尺度の分散分析結果

尺度名	平方和	自由度	平均平方	F値	多重比較 (5%水準)
進路決定不安	6237.82	2	3118.91	114.73 ***	1>>>3,2>>>3
進路選択葛藤	1398.23	2	699.11	42.67 ***	1>>>3,2>>>3
進路相談希求	566.43	2	283.21	13.94 ***	2>1,2>>>3
進路障害不安	1834.37	2	917.19	54.95 ***	1>>>3,2>>>3
進路外的統制	61.77	2	30.88	1.99	
進路情報不足	3552.62	2	1776.31	85.04 ***	1>>>3,2>>>3
進路モラトリアム	517.57	2	258.78	15.37 ***	1>>>3,2>>>3
進路準備不安	4128.58	2	2064.29	102.76 ***	1>>>3,2>>>1,2>>3

<p<.05,<<p<.01,<<<p<.001

主効果が認められたため、多重比較(Tukey法)

を行った。「進路外的統制」を除き、有意な差が認められた。全体として「進路不決断」は1年次に最も高く、3年次に低下することが示唆されているが、特に「進路決定不安」は学年進行での低下が大きい。なお、「進路相談希求」においては2年次に最も高まる傾向にあると考えられる。

(4) 各尺度の関連

①コミュニケーション効力感と社会形成意識の関連の検討

コミュニケーション効力感尺度(改訂版)の3位尺度と社会形成意識尺度(改訂版)の3下位尺度との相関をPearsonの相関係数によって算出し、

男子の結果を表18-1、女子の結果を表18-2に示した。

表18-1 コミュニケーション効力感尺度(改訂版)と社会形成意識尺度(改訂版)(男子、n=881)

	貢献性	責任感	生産的意識
親和性	.479 ***	.388 ***	.394 ***
積極性	.484 ***	.420 ***	.443 ***
高社交性	.150 ***	.188 ***	.178 ***

***p<.001

表18-2 コミュニケーション効力感尺度(改訂版)と社会形成意識尺度(改訂版)(女子、n=242)

	貢献性	責任感	生産的意識
親和性	.390 ***	.278 ***	.464 ***
積極性	.443 ***	.280 ***	.489 ***
高社交性	.316 ***	.190 **	.318 ***

p<.01,*p<.001

これらの結果、男女ともにコミュニケーション効力感と社会形成意識がそれぞれ関連しあっていることが示された。男子では特に「親和性」と「貢献性」、また「積極性」と全ての下位尺度にて相関係数が.400以上と高く、より深い関係にある可能性がある。女子では、コミュニケーション効力感尺度の「親和性」と「生産的意識」、「積極性」と「貢献性」、「生産的意識」は相関係数が.400以上と高くより深い関係にあると考えられる。よって、前回調査と同様に男女の構造の違いはわずかであり、コミュニケーション効力感が高まると社会形成意識が高まる傾向にあることが窺える。

②コミュニケーション効力感と進路不決断の関連
コミュニケーション効力感と進路不決断の関連を検討するために、コミュニケーション効力感尺度(改訂版)の3下位尺度と進路不決断の8下位尺度との相関をPearsonの相関係数によって算出し、男子の結果を表19-1、女子の結果を表19-2に示した。(次頁)

表19-1 コミュニケーション効力感尺度(改訂版)と進路不決断尺度(男子、n=881)

	進路決定不安	進路選択葛藤	進路相談希求	進路障害不安	進路外的統制	進路情報不足	進路モラトリアム	進路準備不安
親和性	-.238 ***	-.056	.038	-.242 ***	-.185 ***	-.344 ***	-.252 ***	-.221 ***
積極性	-.167 ***	-.014	.060	-.170 ***	-.151 ***	-.291 ***	-.248 ***	-.115 ***
高社交性	-.208 ***	-.060	.005	-.133 ***	-.151 ***	-.234 **	-.156 ***	-.145 ***

p<.01,*p<.001

表19-2 コミュニケーション効力感尺度(改訂版)と進路不決断尺度(女子、n=242)

	進路決定不安	進路選択葛藤	進路相談希求	進路障害不安	進路外的統制	進路情報不足	進路モラトリアム	進路準備不安
親和性	-.148 *	.051	.023	-.126 *	-.127 *	-.264 ***	-.172 **	-.152 *
積極性	-.115	-.039	.069	-.136 *	-.154 *	-.199 **	-.228 ***	-.099
高社交性	-.105	-.068	-.015	-.199 **	-.173 **	-.204 **	-.228 ***	-.136 *

*:p<.05,**p<.01,***p<.001

これらの結果、男女ともに「進路選択葛藤」「進路相談希求」を除き、コミュニケーション効力感と進路不決断が関連しあっていることが示されており、対人関係に自信があるほど、進路不決断となりにくい傾向があると考えられる。ただし、進路選択上の葛藤や相談をしたい思うことには特

に影響がないことも示唆されている。

③社会形成意識と進路不決断の関連の検討

社会形成意識尺度(改訂版)の3下位尺度と進路不決断の8下位尺度との相関をPearsonの相関係数によって算出し、男子の結果を表20-1、女子の結果を表20-2に示した。

表20-1 社会形成意識尺度(改訂版)と進路不決断尺度(男子、n=881)

	進路決定不安	進路選択葛藤	進路相談希求	進路障害不安	進路外的統制	進路情報不足	進路モラトリアム	進路準備不安
貢献性	-.037	.022	.166 ***	-.128 ***	-.117 ***	-.231 ***	-.296 ***	-.106 **
責任感	-.110 **	-.153 ***	.043 *	-.281 ***	-.266 ***	-.295 ***	-.407 ***	-.190 ***
生産的意識	-.099 *	.056	.124 ***	-.085 *	-.169 ***	-.272 ***	-.230 ***	-.112 ***

*:p<.05,**p<.01,***p<.001

表20-2 社会形成意識尺度(改訂版)と進路不決断尺度(女子、n=242)

	進路決定不安	進路選択葛藤	進路相談希求	進路障害不安	進路外的統制	進路情報不足	進路モラトリアム	進路準備不安
貢献性	.000	.163 ***	.224 ***	.056	-.038	-.142 *	-.240 ***	.010
責任感	-.145 *	-.063	-.042	-.201 **	-.231 ***	-.317 ***	-.207 **	-.146 *
生産的意識	-.190 **	-.042	-.103	-.163 *	-.259 ***	-.299 **	-.297 ***	-.173 **

*:p<.05,**p<.01,***p<.001

これらの結果、男女ともに社会形成意識と進路不決断がそれぞれ関連しあっていることが明らかとなった。

しかしながらその構造にはかなりの違いが見られる。男子の場合は「貢献性」の高さは進路決断傾向にあるのに対し、女子の場合は「貢献性」の高さは、進路選択にやや不安感を抱く傾向とも見ることができる点である。

一方、「責任感」の強さは男女とも進路決断の傾向と相関しており、最後まであきらめない感情は進路決定を促している可能性がある。

ここにおける男女の構造の相違は、コミュニケーション効力感と進路不決断との相関よりも明確であり、はたらく基礎感覚が男女で異なる可能性を示唆するものでもある。

3 結果Ⅱ 高校生と大学生の比較

(1) コミュニケーション効力感尺度(改訂版)と社会形成意識尺度(改訂版)の検討

①「コミュニケーション効力感尺度(改訂版)」の信頼性(内的一貫性)を測定

Cronbachの α 係数を算出し、表21に示した。この結果、.858～.719と、十分な信頼性(内的一貫性)が確認された。

表21 コミュニケーション効力感尺度(改訂版)の内的一貫性

下位尺度	項目数	α 係数
親和性	5	.858
積極性	5	.775
高社交性	5	.719

②「社会形成意識尺度(改訂版)」の信頼性(内的一貫性)測定

Cronbachの α 係数を算出し、表22に示した。この結果、.846～.759と、十分な信頼性(内的

一貫性)が確認された。

表22 社会形成意識尺度(改訂版)の内の一貫性

下位尺度	項目数	α係数
貢献性	5	.846
責任感	5	.759
生産的意識	5	.833

(2) 高校生と大学生の学年差の検討

「コミュニケーション効力感尺度(改訂版)」と「社会形成意識尺度(改訂版)」の3つの下位尺度ごとの平均と標準偏差を男女別に算出し、その平均の差をt検定を用いて検討した(表23,24)。

表23 コミュニケーション効力感の学年差(N=1255)

尺度名	高校生(n=1123)			大学生(n=132)		t値
	平均	標準偏差		平均	標準偏差	
親和性	16.58	4.11	>>>	14.69	4.59	4.942
積極性	16.01	3.83	>>	14.90	3.60	3.167
高社交性	15.21	3.91	>>>	13.01	3.91	6.121

<<p<.01,<<<p<.001

表24 社会形成意識の学年差(N=1255)

尺度名	高校生(n=1123)			大学生(n=132)		t値
	平均	標準偏差		平均	標準偏差	
貢献性	19.44	4.07		19.27	3.89	0.464
責任感	19.80	3.87		19.20	3.55	1.712
生産的意識	16.64	4.07	>>	15.45	3.88	3.183

<<p<.01

まずコミュニケーション効力感について検討を行う。全ての下位尺度において、大学生に比較して高校生の方が有意に高い得点を示した。次に社会形成意識は、「生産的意識」において、大学生に比較して高校生の方が有意に高い得点を示した。また、有意差は得られなかったものの、他の下位尺度の平均値は高校生の方が比較的高いことが挙げられる。

つまり、大学生よりも高校生の方がコミュニケーション効力感、社会形成意識が高い可能性が示唆されている。

(3) 大学生におけるコミュニケーション効力感と社会形成意識の関係の検討

コミュニケーション効力感尺度(改訂版)の3位尺度と社会形成意識尺度(改訂版)の3下位尺度との相関をPearsonの相関係数によって算出し、その結果を表25-2に示した。なお、大学生については女子の被験数が26名と少ないことから、男女別の検討は行わないこととした。

表25 コミュニケーション効力感尺度(改訂版)と社会形成意識尺度(改訂版)(全体、n=132)

	貢献性	責任感	生産的意識
親和性	.354 ***	.289 ***	.379 ***
積極性	.449 ***	.418 ***	.559 ***
高社交性	.060	.174 *	.160

*p<.05***p<.001

これらの結果、高校生と同様にコミュニケーションの「親和性」「積極性」が社会形成意識にお

ける「貢献性」「責任感」「生産的意識」とそれぞれ関連しあっていることが示された。ただし、「高社交性」との相関係数は低く、あまり関係がないとも言える。つまり大学生の場合、苦手な相手との対人関係の自信は必ずしもはたらく基礎感覚と関係していないことが示唆された。

【全体考察】

1 各相関の考察

2回にわたる高校生に調査と、大学生に対する調査の結果、コミュニケーション効力感と社会形成意識に根本的な構造の相違はないと見ている。

性別や世代を超えて、コミュニケーション効力感が高まると社会形成意識が高まる傾向にある可能性はきわめて高いと考えている。

また、高校生による「コミュニケーション効力感」、「社会形成意識」、「進路不決断」の各相関調査から、「コミュニケーション効力感」と「進路不決断」には男女ともかなりの相関が見られ、対人関係の自信と社会形成意識の高まりが進路決断を促す可能性が高いことが明らかとなった。

「社会形成意識」と「進路不決断」との相関では男女でかなりの構造の違いがあった。特に大きいのが「貢献性」と進路決断の関係である。「貢献性」が高い男子が「進路決断」傾向を示す傾向があるのに対し、女子の場合は「モラトリアム」傾向ではなくなる一方で「進路相談希求」が上昇傾向にある。一方、「責任感」の強さは男女とも進路決断の傾向と相関しており、最後まであきらめない感情は進路決定を促す。

つまり、「貢献性」と「進路決断」の関係には男女差があり、勤労観そのものが男女でかなり異なっている可能性が推察される。特に貢献心の高い男子は進路決断が明確となる傾向が強く、女子の場合も同様にモラトリアムを低下させ、進路決断を促す動機とはなるが、選択葛藤が起こり、相談希求が高まる傾向があることもわかった。

コミュニケーション効力感や社会形成意識が高まった男子については、コミュニケーションの自信と貢献心を高めることでキャリア発達を促し、女子については、その上で進路相談を積極的にを行い、進路選択葛藤に伝えていくことが効果的である可能性が高い。

2 まとめ

今回の研究から、「はたらくこと」は他者との関係において成立するという漠然とした意識は、十分高校生の中に定着していると考えられる。

対人関係の自信とはたらく基礎感覚の相関の深さがその証左である。そのことは対人関係に係る自信を深めることが、はたらく基礎感覚を高めることを明らかにした。

また、はたらく基礎感覚の重要性が高校生の認識にある程度定着している点が推察できる。はたらく基礎感覚と進路決断の相関がその証左である。言い換えれば、はたらく基礎感覚がない場合、進路決断をする理由が見つからなくなる現象が起きているとも言える。

これらの点は、指導現場の感覚とも一致しており、学校におけるキャリア教育がある程度の説得性をもっている可能性を示唆するものである。

気をつけなければならないのは、コミュニケーションの自信のなさがすべての足かせとなっている可能性も高い。その意味で、コミュニケーションの自信を高めることこそが、キャリア発達の前提であることは疑いなく、少なくとも高校低年次からのコミュニケーション教育は大変重要である。

コミュニケーション能力の重要性については言うまでもないが、そのことを過度に強調することには特に注意を要すると考えられる。能力は相対的なものであるが、その相対性を強調することで、結果的に能力が低いと評された生徒の進路決断ほかキャリア発達を大きく阻害する可能性が考えられるからである。

コミュニケーション能力を高める取組はもちろん必要であるが、より重要なのは、その自信を深めることである。そのことが連鎖的にキャリア発達を促す。そこで求められる自信はあまねく全ての生徒に求められるものと考えている。

しかしながら、発達障がいを抱えた生徒など、どうしてもその壁を乗り越えられない場合も考えられる。その意味で、特に高校3年次においては、過度にコミュニケーションの自信だけを進路決断との関係で強調せず、弾力的な指導を考えておく必要もあると痛感するところである。

3 キャリア発達基礎力診断システムの開発

(1) コミュニケーション効力感、社会形成意識、進路不決断尺度を活用した生徒見立てシステム（試行版）の作成

当該システムについては生徒のキャリア・カウンセリングに資するものとして当初からその作成を企図していたものである。今回熊本県高等学校進路指導研究会事務局長の伊藤誠一先生の多大なご協力により、そのシステムの試行版を作成した（表25、26）。なお、当該アンケートの名称は、「コミュニケーションとしごと観」（コミュニケーション効力感および社会形成意識）、「しごと観」としている。

表25（コミュニケーション効力感尺度および社会形成意識尺度を活用）

コミュニケーションとしごと観のアンケート 心りがえりシート			
下記に掲載された内容は、現在のあなたのコミュニケーション能力を表すものではありません。これから、あなたがコミュニケーション能力を身につける上で関係が深いと思われる6つの項目に、どれだけ興味関心を持っているかを表しています。これからの、学習活動や学校での活動の参考にしてください。			
		クラス	番号 氏名
項目	あなたの数値	この項目について あなたの提案	
コミュニケーション	親和性	3.4 /5.0	平均的なレベルです。多くの人と付き合うことや人付き合いに対してそこまで前向きでない状態の可能性もあります。特段に多くの友人とつきあうことにならないため、情報が偏りやすく、思い込みにつながる可能性もあるため、注意が必要です。まだ2年生以下など、高校卒業までに時間がある場合は、人間関係の抵抗をなく多くの人と関わることは人生を左右する大きな意味があります。一歩前へ進んでみましょう。
	積極性	3.6 /5.0	積極的に人間関係を深めていく自信があり、他者との人間関係を積極的に行っていくとする意識が高い可能性があります。自分から主体的に人間関係をつくっていく自信がある程度あります。対人関係だけでなく、ある程度自分に目に向けており、あなたがあなた自身をよく見えています。比較的活動の意欲も高く、何に対しても積極的になれている可能性があります。やや学習面で不安を感じている可能性があります。
	高社交性	3.0 /5.0	平均的なレベルです。付き合いにくそうなど人間性をもてる自信がありません。あえて苦しい相手と関係をつくらうとはしない状態です。必要な情報を得るには勇気も必要です。自分から行動し情報を得ることを経験的に学ぶ必要があります。
しごと観	貢献性	2.4 /5.0	どちらかというと、立場を置き換えて他人の立場で考えようとしていない傾向があります。他人の喜びを自分の喜びと感じることができれば、仕事そのものが楽しく、毎日を前向きにおくることができますが、他人の喜びを感じられず、仕事をする意味を感じにくくなり、楽しい毎日をおくることができなくなってしまいます。相手の立場での考え、感じることができるように、人の喜びを自分の喜びにできるように、常にそれを意識して生活してみましょう。
	責任感	3.2 /5.0	平均的なレベルです。決めたことをあきらめるのに抵抗感がなくはないのですが、時々投げ出すこともあるかも知れません。健康を害しては何にもなりません。責任を果たすことも大切。人のためになって初めて仕事というものは成り立ちます。責任を果たせるように、自分自身をしっかりと管理し前向きで居続けられるように、調整を図ることも大切です。最後までやり遂げる責任感、職業生活においては、はめられることというより、ほぼ当然のこと。あなたの働きが世の中のためになることを再度思い出しましょう。
	生産的意識	2.8 /5.0	平均的なレベルです。主体的に考えて課題を解決したり、問題点を自分で見つけてこれを解決するなどの生産的な視点でものを見る機会が少ないようです。全体をよく見て何が問題点なのか、本当に必要なことは何なのかを見放し練習をしましょう。そしてそれを求める人に提供できるように努めます。そのような力を者に付けることは、社会に出てあなたが活躍し成長し、リーダーになっていく可能性につながります。

グラフにすると...

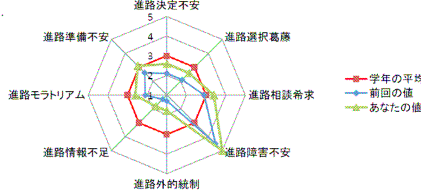
表26 (進路不決断尺度を活用)

しごと観のアンケート ふりかえりシート

組 番 氏 名

項目	検査値	この項目について あなたの提案
進路決定不安	2.6 (5.0)	進路を決めることにより不安はありません。2つのケースが考えられます。1つは多くの他者と関わる中で能力や適性についての自分への理解が進んで進路目標が明確になっているケースで、いま一つは、他者と関わる機会が少なく、自分の能力や適性の実感がわからないため不安な状態です。自信をもつことは大切ですが、その根拠も大切です。友人や先生、家族など多くの人と深く関われば、本当の情報がわかります。他者との深いある会話はあなたの不安を一つ一つ解消する確針となり得ます。
進路選択葛藤	2.6 (5.0)	進路選択で特に悩んでいるわけではありませんが注意が必要です。2つの可能性が考えられます。一つは自分のことを知るための他者との関わりや社会を知る情報が適度にあり、自分の能力・適性が明確なケースです。その際も情報は正しいのが、能力・適性は合っているのかよく考える必要があります。もう一つは逆に他者との関わりが少なく、社会的情報も十分で、広告宣伝的情報だけで進路を決めてしまっている場合です。その場合、他者との本質的な進路情報を増やし、進路を複視点をつくるのが大切です。
進路相談希望	3.4 (5.0)	特に他者に相談を強く求めている訳ではありません。進路に強い不安感をもっている可能性は高いです。3つの可能性があります。1つはあなたに進路情報があり、進路のことは自分なりにわかっていると感じている場合。自分の選択が正しいか要再検討。学校情報や業界情報は実際の進路に必要な要素がありますが、広告や宣伝も多々あり注意。2つは進路に関心がない場合。進路を考えるのは自分の幸せを考えること。人生の幸福を考える機会が必要かも知れません。3つ目は人間関係に自信がない場合。相談すれば勇気ももてます。身近な人と話せる勇気から人生が一気に開ける可能性があります。
進路障害不安	5.0 (5.0)	希望する進路に強い不安を感じています。それはあなたの能力や適性というより、経済面や周囲の反対などを考えることだと思います。経済面は保護者の命懸けな話し合いが重要で、勇気をもって話し合います。できないなら学校の先生と相談して見てください。具体的・現実的かつ真剣に進路を考えたい行動を熱心に続ければ、保護者も受け止めてくれると思います。100%希望通りの進路が決まることはほぼありません。多くは折り返しの中からも将来を展望します。そこから多くの人が自己実現しています。
進路外的統制	1.8 (5.0)	進路は運や偶然、周囲の影響ではなく、自分の能力や適性で決まると考える傾向がとも強いようです。社会の中で生きる以上、周囲の影響や環境は進路に重大な影響を与えます。しかしあなたが考えるおとり、努力や行動に勝るものはほぼありません。社会の中であなたが起すことは偶然ではなく、あなたの行動から生まれています。幸運は求めることにやります。運だけに任せておくべきではありません。「こうしたい」と心に掛け、努力を続けることで幸せが向こうからやります。学調調査でも証明されています。
進路情報不足	1.8 (5.0)	自分自身のことがわからない悩みや進路情報の不足を感じることはほとんどないようです。「友人や先生などから十分な関わりで自己理解ができており、進路先のごく深いレベルでわかっている場合」と自己理解を深める意識があまりなく、進路先情報も必要性を感じない場合が考えられます。自分のことは自分だけではないです。他者との深い関わりが必要。広告・宣伝的な進路情報でなく、実質的な本質的情報、表面的でなく深いレベルの情報が必要。積極的に先生や友人と進路について話し込み、進路希望先に電話で問い合わせるなど思い切った行動が必要。情報量で判断が変わり人生全体が大きく変わります。
進路準備不安	2.6 (5.0)	進路のことに関心は向かい合っています。ここで考えられることは2つあります。一つは進路に関して不安がなく、まっすぐにその進路を目指している場合で、もう一つは進路のことを考えるとそのものに意義を見いだしている場合。前者の場合も成績や学習、家族の同意など大切なことをしっかりと確認する必要があります。もう一つの進路を考えることに意義を見出すことにはおおいですが、それだけに熱心し、将来を展望した行動ができていないことにならないよう、学習面などの頑張りが必要となります。
進路準備不安	3.1 (5.0)	受験勉強や就職対策、資格取得などに過度に不安を感じているわけでは無いようです。必ずしも進路を具体的に、現実的に考えられていない可能性があります。自分の状態を理解し、夢を叶えるまでとれる距離感を知らぬのが大切。学習が暗黙でなくやる気が出ない人は解決法を先生や友人に相談します。前進すれば答が出ます。答が出ればやる気になります。人生の進退に妥協は禁物。粘り強く解消します。友人との進路準備の会話はあなたをその気にします。適度なライバルの存在はあなたを生き生きとさせてくれます。

グラフにすると...



当該システムは、既に複数の高等学校で運用されており、順次改善する方向で検討している。

(2) キャリア発達基礎力診断システムの開発

当該研究結果と分析をもとに、これをキャリア発達基礎力診断システムに応用したいと考えている。このシステムは、多様な高等学校で利用可能なものを目指しており、生徒のキャリア発達段階とその方向性や今後の考えられるプロセスを明示するものであり、コミュニケーション効力感、社会形成意識、進路決断を総合的に判断可能なカウンセリングツールとして開発する。

謝辞

当該研究にあたって、追手門学院大学心理学部心理学科教授、日本キャリア教育学会会長の三川俊樹氏及び大阪青山大学学習支援アドバイザー鈴木秀一郎氏に多大なご協力とご指導ご助言を賜りました。心より感謝申し上げます。また、コミュニケーション効力感や社会形成意識、進路不決断尺度を活用した生徒見立てシステムの開発に多大なご協力いただきました熊本工業高等学校教諭、熊本県高等学校進路指導研究会事務局長の伊藤誠一先生にも重ねて御礼申し上げます。

引用文献

- ・「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」(2011 中央教育審議会答申 平成23年1月31日)
- ・長須正明「高校生の進路選択における不決断の研究」(1994 立正大学哲学・心理学会紀要, 20)
- ・宮原清,森中浩次,平山篤「コミュニケーション効力感尺度の試みと実践」(2010 平成22年度福岡県高校教育研究会研究紀要第36号)
- ・鈴木秀一郎「生徒・学生の不適応感に関する研究」(2010 追手門学院大学大学院修士研究科修士論文)
- 参考文献
 - ・宮原清「コミュニケーション効力感を意識した教育プログラムの試み」(2010 日本キャリア教育学会 第32回研究大会・発表論文集)
 - ・宮原清,森中浩次,平山篤「キャリア発達を促すピア・サポート型教育プログラムの開発」(2010 平成21年度福岡県高校教育研究会研究紀要第35号, 111)
 - ・宮原清「コミュニケーション効力感尺度を利用した生徒見立てツールの作成」(2011 日本キャリア教育学会第33回研究大会発表論文集,106~107)